

花 橘

魚が恋人

教務課長 玉木 漱亮

発行日

令和7年6月25日

第4号

発行・編集

三崎高校総務課

「先生は魚が恋人なんですか？」
 そんなふうに聞かれることがある。三崎に来て二年三か月。僕はその時間の多くを「釣り」に捧げてきた。もちろん誤解のないように言っておくが、仕事もちゃんとやっている（はずだ）。でも、気づけば周囲からは「魚が恋人」と呼ばれるようになっていた。悪くない。いや、むしろ最高の誉め言葉だと、密かに気に入っている。そんな僕から、今日は「釣りが教えてくれた人生の話」を少しだけさせてほしい。そんな釣りは、思い通りにいかない時間の連続だ。いくら竿をシヤクつても、まったく魚がかからない——そんなことは珍しくない。だから途中でやめてしまいう人も多い。けれど、不思議なことに、人は疲れたとき、なぜか海に行きたくなる。釣れなくてもいい。ただ海を眺め、風に吹かれ、何も考えずに竿を垂らす。その時間こそが、心をゆるめてくれるのだ。

とはいえ、何度も挑んでまったく釣れないとなると、さすがに心が折れそうになる。そんなとき、僕は考える。「どうして釣れないのか？」「何を変えたら釣れるようになるのか？」原因を探り、仮説を立てて、次の一手を考える。釣り方を変えるか、場所を変えるか。ルアーの色、時間帯、潮の動き——細かく調整して挑む。このプロセスこそが、まさに「課題解決力」そのものだ。釣りは、考える力を鍛えてくれる。失敗と向き合い、試行錯誤を重ねる力が自然と身についていく。

そして、釣りでもう一つ重要なのが「情報収集力」である。今はネットやSNSで釣果情報が手軽に手に入る。でも、それだけでは足りない。現場に足を運び、そこで釣っているベテランに話しかける。「今日は何狙いですか？」「最近、ここで釣れてますか？」「どんな仕掛け使ってますか？」そんな何気ない会話から得られるのは、ネットには載っていない「生きた知識」。それだけじゃない。見知らぬ人に声をかけ、やり取りをする中で、自然とコミュニケーション力も鍛えられていく。

狙っていない魚がかかることがある。釣りはそれを「ゲスト」と呼ぶ。人生にも、そんな思いがけない出会いやチャンスがある。僕もかつて、タイラバ（鯛を狙うルアー）で突然大物がヒットしたことがある。リールが悲鳴を上げ、糸が引き出される瞬間、全神経が研ぎ澄まされる。十分の格闘の末に釣り上げたのは、八十センチメートルを超える鯛。手足が震えるほどの達成感に、「この瞬間のために釣りをしている」と実感した。釣りには運の要素がつきまとう。魚がいるか、食いつくか——すべてが思い通りにはいかない。だからこそ僕は、「こみを拾って運を拾う」という言葉を大切にしている。釣りの場のゴミを拾い、部活動ではグラウンドの草を抜く。運は待つものではなく、日々の行いで整えていくものだと思うのだ。

釣りは、社会に出たあとも役に立つ。成果が出ない時間に耐える力。考える力。人と関わる力。そして、見えない運を整える習慣。釣りを通じて僕が学んだことは、人生のどんな場面にも応用できる。だからこそ、もし今、何かに行き詰まっていたのなら、海へ行ってみてほしい。竿を片手に、風を感じながら海を見つめてみてほしい。きっと、そこで見える景色は、あなたの心を少しだけ前に進めてくれるはずだ。

愛媛県高等学校総合体育大会

5月31日から開催された県総体に、男子バレーボール部、男子卓球部、テニス部が出場し、各会場で、熱戦を繰り広げました。3年生にとっては最後の大会でした。最後まで粘り強く、自分のベストを尽くして戦い抜いた3年生の姿は、これからも後輩達の良い目標となってくれると思います。引退後は進路実現に向けた戦いが始まります。部活動を通して学んだことを今後の学校生活にも生かし、より一層頑張ってください。1・2年生は引退する先輩達の力強い姿を忘れず、良き伝統を引き継いでいってください。本当にお疲れさまでした。素晴らしい感動をありがとうございました！

